

三重県産ウスヒラタケの効率的な栽培技術の開発

令和7年度～9年度（国補：林業普及情報活動システム化）

井上 伸

県内中小規模のきのこ生産者は、安価な大量生産品との競合により、厳しい経営状況にある。夏場はきのこの低需要期であり、加えて、空調費用が多くかかるため、採算性が悪化する時期となっており、きのこ生産者からは夏季に低コストで生産可能な品種の開発が望まれている。

以上のことから、市場流通量は少ないが機能性成分に富み、食べておいしい等、特色ある品種であり、高温でも子実体を形成するきのこ栽培品種としてウスヒラタケを対象とし、その当研究所選抜株の培地特性などを明らかにし、省力的かつ生産性が高い栽培技術を確立する。

1. アラゲキクラゲ栽培用培地を用いたウスヒラタケの栽培試験

菌床は、培地組成に県内菌床作製事業者が通常使用しているアラゲキクラゲ栽培用培地をそのまま用い、当研究所で作製したウスヒラタケ選抜株の種菌を使用した。培養期間の試験区は、40日、50日、60日、85日とし、培養終了時点で発生処理を行い、栽培室に移動した。子実体の採取は、8分開き程度で採取し、この生重量を測定した。解析は、発生処理から30日間および100日間の累積子実体発生量について多重比較を行った。

この結果、30日間の累積子実体発生量は、85日が最も多く、他の処理区より有意に多かった。100日間ではいずれの処理区間においても有意な差は認められなかった。これらのことから、菌床を長期間（85日）培養することで初期（30日間）の発生量は増加するが、栽培が長期（100日間）にわたると、培養日数が子実体発生量に与える影響が小さくなる可能性が示唆された。

2. 生産性を高める発生処理手法の検討

菌床は、シイタケ栽培用培地を参考に作製し、ウスヒラタケ選抜株を接種したものをを用いた。培養期間は60日程度とし、発生処理方法の検討として、菌床側面両側に5cm程度のスリットを各面5本、千鳥状に配置した区（対照区）、菌床底面に底面の長辺に対して平行に15cmのスリットを2本入れた区（A区）、底面に5cm程度のスリットを5本入れた区（B区）、底面の対角線上に15cmのスリット1本と、それに並行して上下に5cmのスリットを2本入れた区（C区）を設けた。子実体の採取及び解析は先の試験と同様に行った。

結果、いずれの発生処理方法ならびに発生期間においても子実体発生量に統計的な有意差は認められなかった。このことから、今回試験を行った発生処理方法は、従来行ってきた発生処理方法（対照区）と同等の発生量が期待できることが示された。

3. 生産現場における栽培実証試験

栽培実証試験は当研究所Webサイトにて募集し、申し込みのあった県内6事業者を対象とした。各事業者において販売価格（円/g）、販売数量もしくは子実体発生量を記録し、当研究所で集計を行った。解析は、記録に不備があり、販売数が過少と考えられた1事業者と販売数量を推定できない1事業者、自然栽培であることから冬季に子実体発生が中断した1事業者を除いた3事業者で、1菌床当たりの子実体発生量および売れ残り率、売り上げを算出した。

この結果、1菌床当たりの子実体発生量は事業者間でバラツキがあり、504-828gと推定された。また、売れ残り率は0-6.3%であり、売れ残りが出た時期は8月が中心であった。1菌床当たりの売り上げは1,072-1,458円と推定され、最大386円の差異があった。その理由として、子実体発生量の違いや、事業者によりg当たりの売価が最大1.7倍異なったことが影響していると考えられた。